徒然草

特別
へ10
2266
1

利
2266
1-2

東京帝國大學文學部

宮内庁書陵部

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆるしけるなり
ソノ一乃宣の御代の源氏
このうちにて三てとりわけてこのうち
三てなりし人とをもしるべし

とこしなへにくもまこと冠らう馬車しつらひあふ
ぎうちうちいよいよ羽蘭をとり山事なれとも九
条殿乃巻紙ふも仏名経乃清流乃禁中十事とも
うをの つるふをれわゆけ乃とりぬさとうろ
とけくうとすとうれ

三

うちけふらくとも条この海とうん男そとさう
くくく西乃うつさ式とうたんうとさ想さな
ふとうくまてく和ようこめすきくひありさや
乃つうめ世ようつとけ山乃ふうまくあふ
きさうふ四ひうれふをひうれうふ
うしれなけうおくきれうくひうもた

うれふをふつけあうくあ世ようやうう次四うれん
うあうまりかうつよわうるまと
四
仮乃世れ事乃ようわうれとけ乃みうらうかふ
ふうふう

五
万葉ふうまつとうりのふ人乃ふ歌うみとふ
けうふありひみうれうあふうるうきうふ
門うこあうくまけ事ものくあくこ言しるけう
くにあうまり歌巻中御ふ乃ひもむ能乃
月冠すくうん事とうもあほうぬ

六
うう月乃御んうとなうんふもまくかするう
うんうまつぬめなくくうう和ん第中書五九

条太政大臣花園左大臣みなぞうしらん事とはつ
ひかでりぞめ給乃もしし子孫おとらぬよし侍
まろ乃あるれのつるぞうろさまありとも世継の翁
乃物うかゞいつゝ聖徳太子の流をもとり侍るつ
たへられける時もいてとこそれうしあもちらく子孫あ
らせしとぞいふなりと侍りけるとかや
あるいは家ざきのれけすて鳥部山の煙くらさら
との侍らつるかひなくもいうの花乃なられまらん
世たらさあなとこそいぶらしけまく家のあれとかるを
人からなりきゆへとりけるふれば夕をとまちなは
堤乃青柳をとらぬてすをるけくとてせ

とらうを結らふ也ふみかはせきやあらそうまじと
思ふもせとすくせをも一夜の夢のなかにて
とあすれてぬ世ふかんかくさ苦とをもちえをいふ
そでん命あるけまし厚ゆりしあへくいかを定十
ありらぬほとかくれなんとすめ中とかる人けまし
ぞあかくれきらねまもりとらとてみろなき人ゝて
いくまらん事をゆりいハ夕の陽ま子孫とおそく
さらの行るれとらんにまくの命とあるまうしけさを
ら世ももつかほころぶもの花乃あられなせと
ならぬあんあるましきさ
世乃人せんなゆとらい事多欲ゝはまて人の心を

あはれなる所にて八月の月のころまことにおもしろく
見えけるにかの夜ふかくきこゆる松風の音おもしろ
きくにつけてもわが庭の草むらの中なる虫のね
すゞむし松虫のこゑあはれなる調べにて調子もあはせ
しぼりてゆくへもしらぬ命なきおもひを
くのみのかたとはかなくみえけるかなしさのほどや
まかりのつゆけくえたるうれしさ調子もあへりて
さ
華義のくるまにのりてものゝやみのかなしさを
（○ものゝふの心とやらかくしかりき）
むかへさ文時のよに作れる［illegible］とうたふ
られたるは家のもとにおちて［illegible］
たる后後法大寺殿のあそびの管絃（しげん）ありし鶏の鳴

せうしく縄をかけまくりけるとて御行の人々を
乃ありけれどもなかなかはかなくつまづきさせたまひ
させられけるにつけても後の世をも思ひてまでも
ゆかしき綾小路宰乃あそびしまゐて小坂殿の山里
まや縄をひきまはしたるはかなくあはれなる
鵠もおもてのやまの花のかほりの色のかぎり
をとめてはなるゝ人のかなしきことこそ人乃かなしき
うたはれてはかなしくもおもひしめる
とどめはかくありてこそとおもふ

十
神無月乃比くるまにておもひかけぬ山里に
尋ねる事を待ちてたるわかのなかに
吉乃ことはおもひよそへて

心ほそくすみなしたる庵あり木乃葉に
うつもるゝかけひのしつくならてはつゆおとなふ物なし閼伽
たなに菊もみちなとおりちらしたる さすかにすむ人
乃あれはなるへしかくてもあられけるよと哀
に見るほとにかなたの庭におほきなる柑子乃
木乃枝もたわゝになりたるかまはりをきひしく
かこひたりしこそすこしことさめて此木なからまし
かはとおほえしか

十二

おなし心ならん人としめやかに物かたりしてをかしき
事も世乃はかなき事もうらなくいひなくさまんと
こそうれしかるへきにさる人あるましけれはつゆ
たかはさらんとむかひゐたらんはひとりある心ち
やせんたかひにいはんほとの事をはけにときく
かひあるものからいさゝかたかふ所もあらん人こそ我は
さやは思ふなとあらそひにくみさるからさそとも
うちかたらはゝつれつれなくさまめと思へとけには
すこしかこつかたも我とひとしからさらん人
はおほかたのよしなし事いはんほとこそあらめ
まめやかの心の友にははるかにへたたる所の
ありぬへきそわひしきや

十三

ひとり燈乃もとに文をひろけて見ぬ世の人を友と
するそこよなうなくさむわさなる文は文選

のあはれなる事をさして白氏文集老子なとの葉萄
義の篇は回乃ことばをうつしけるものをいふ也への
そのあはれなる事にあはず
吉
和哥のよ枕ことはしきをしれはあはれ乃こゝろ乃
志らるゝもいひあはれなりしとおもしろきぬれ志をも
好色の家とつて中ましくするぬけれはおもしろき
一婦にひとしくひとすへてとなるとなれともなるさ
あなたも乃中にありてそやことの葉乃おほよそおほかれ
ぐしきおかめれそみ貫之らことまてなりけれ
くふといへる古今集乃中にかくいひとやひ
つくれとはその世乃人（事々）ましまなへてさとまう

とはみえとその世乃ことはすくへ同はさらひ乃え
おほしはあふひさらくかくつひあくらるゝものをも
志りゝて源氏物語ふる物かたりのみなりける
新古今ふは旅ふ枕へ歌りけりひしきとつて
ららとめつゝかあれは侮とにすらしくてけるあ
かとやみはるんほまてはあるを元識者乃時よろ
志つさうしけらるゝ後まも猶更に惑し給下
されけるふし家長の日記ふはりもりならるいきと
いかへとかくしぬすとつ事もあまていとやと
まことあつるもの同ふ枕をむりし乃人何しあ數
ぞらにおほかれあしとやらくすゝゆへしい事

海もきこえけるとおろかなれども
曲乃こと葉にそもそもあるべきなる事のあるべし
しるべ乃人のそなへいとうひとくそるぶとくはとられ
つるくきうかれまや
ま
いけくもあもこと接くらるめるもろ
まれそわるらもてかこ見あること井のひとる前
心量なくはいとあるれ事のこうがるる絶へた
らりとあくるみゆるその事はの侵をふわとる
なとひゆること行くけまとゆ乃不ふくこう
ろりとこつひとくはるる洞庭まくとき
そくなあるべくちるき少し常るるとこ
そ見あもち結るくにあるるとも
ま
結あるなまめかくおりるけと天鼓乃れ
色ひるること常にきくれそ琵琶和琴
も
中と音にくこと新アくにるくけるつ波りこそ
ア
ものくるる乃濁アまれたるる
十八
人そとのもとはまゆたし驕アとるるけく
賊とりとせはひとるるたんそうかるこさ
けるるがらさ人乃ものるれるるるふ
汗由とるる人をみるるるくるるを
くるるもるてはまくのけるとくるる
のきとるるもと人乃えるせるるれるるさ

まだ桜さかりけるに風にちられたりけるとかの海
あとくすくいまとさ手ふ山をひくちなりのとける
いふらく色乃ならず一しかりきん時景を夕月に
ふる海すてざらん一本ありけるを夕日は荒ふ
姫しおしとふはむとめもりさふらむ乃人の荒とい
みしと思へしらず志すしとあめく世ふて何人けあ
ふれし乃人さうてありてつに夜毎のれ
折花乃ふつりかなふらし梅毎に哀なれとなるに哀
秋のますまれと人毎にいふあれどもかくれもなき
と一きはなもうてけ松そ春乃そしきふたら
おあさ鳥乃声なるともとの別とさめさくのと

中る秋日のけもかうれ乃草乃りと以つるは中ま
ふうかふみまてりく花をゆかしくらて何程よ
こそあさ折しも西風ふうつさきふあらぬ志て
ちらる色ゆ春霞もなり紛まもしらけるあなと
のとうだなやまのは花橘そ名にしおひ軒梅の
まおひかりかりし人乃事ともさうつる夢を折ひ
出ける和くいむ乃こうけし夜乃おもひけるさき海
志つるずもくおもひいてられ事のあり灌佛
乃ほとりの比ゆ葉乃あさき思ひもしけしき
紛ほとう世乃あわれを人の思ひさともまれと人
乃絶しもしらけさうあふれあ月あやなうは

早苗とる比くみなのくるまとそかりうちぬらし
六月の比ほ中しき家ゝ夕くほの志ろくみえるや
みな月はらへをぞかるれ。七月極又ほしセ
夕まけるとき海の人けふ中ゝく物をまゐる
かぜ夜すさまくくる比萩乃下葉ゑけくれけさ
思ひほけてたるとかへらんあはれに秋のよるもか
しほれ志き野分乃あとたかきはれいひ侘
くれなゐざんし柿の梢も色くにとぼしさる
もみぢはつ事又は海をいとへるとほかる
志ぐれ雲はれぬ暁かくるくれし筆のま
みそれあらきなかさびしくけれもの

夜さむのすれば人乃みなさかりもおちゆて冬ら
まめぐしきくらぶ秋はおさくそうろふまゐれ
ぢやうの茅ににみちぬりそえもりく霜つとし
ろふかけおしゝゆうわり標乃ひるなかし
ぐれども乃くれなそ人よにつきおきかりぜう
文なく嵐なるずすさ海しき梅りてみる人もな
き月のよしけ年もめの廿日おもりの色どもぞ
ほりきのをども御仏名當乃使とけりまそ
おれはやんとのおぼ事とも志けく暮乃いろ
きにざうかへりのりりけりねこみきんそ海
すわらしきや追儺より四方拝まてくるはね

しろけれつこもりの夜いたうくらきに松ともし
て夜半すくるまて人の門たゝきはしりありきて何
事にかあらんことことしくのゝしりてあしをそら
にまとふか暁かたよりさすかにをとなくなりぬるこそ
年の名残も心ほそけれなき人のくる夜とて
魂まつるわさはこの比都にはなきをあつまの方
にはなをする事にてありしこそあはれなりしか
かくてあけゆく空のけしききのふにかはりたりとは
みえねとひきかへめつらしき心ちそする大路のさま松たてわたして はなやかにうれしけなるこ
そ又あはれなれ

二十
なにかしとかやいひし世すて人のこの世のほた
しもたらぬ身にたゝ空のなこりのみそおしき
といひしこそまことにさもおほえぬへけれ

二十一
よろつの事は月みるにこそなくさむものなれある人
の月はかりおもしろき物はあらしといひしに又ひと
りつゆこそあはれなれとあらそひしこそおかしけれ
おりにふれはなにかはあはれならさらん月花はさら
なり風のみこそ人に心はつくめれ岩にくたけて清く
なかるゝ水のけしきこそときをもわかすめてた
けれ沅湘日夜東流去愁人のためにとゝまる
事少時もせすといへる詩をみ侍りしこそあはれなりし
か嵆康も山沢にあそひて魚鳥をみれは心たの

の一世とうの人きくに形まさりてきこゆるを所ふさうの海ひ
ありさまうれしくうらやましくとし事はあらし

廿二

行事しぬるこの世のうらうらさうやうに事ふ
ゆくくとうりあれしあまのたくなくよつて
もろこしけくさうつるものを古代名所うつし
とみやまこのあらと業みふるとうしよりことはは
いとさあつふうこ業ごくらくうるうるを
てゆくるれうかへそ車りうけよ夫うけすと
うひうとやうあるはそてあけよきあけと
とうふ言葉寡くれとうとうつきとうあし
ものくせとうひうる信海乃法華不なるとう御

うあとうとうあるとうぶくうとうとうる
きくはかりせてもて

廿三

かうへうまあ世ていたれ九言乃祈うしさ
ふあうるあるとうとうを先くうこあるれ所蔵
あとうを いい行義行間すれとうとうきうへし
おやあ乃所うあうあてさふ蔵ふ拾遺ふうりやみ
とうぶくくとうさうあるを体と乗乃ものけせを
いうとうけまご乗乃ものをういうりと
ううるてうあ又ものくうしどてあ乃けりくまをこのる
とあるをうけるり法可乃下人をとうとうとうあふ
まうあしかりこうけるとうとうあるとうこ

[illegible]

十四

[illegible]

十五

[illegible]

[illegible]

十六

[illegible]

[illegible]

十七

[illegible]

とのもりのとものみやつこよそにしてはらはぬ庭
に花ぞちりしく　いまの世のことしげきにまぎれ
て院にはまゐる人もなきぞさびしげなる　かゝる折
にぞ人の心もあらはれぬべき

廿八
諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ　倚廬の御所
のさまなど板敷をさげ葦の御簾をかけて布の帽
額あらあらしく御調度どもおろそかに皆人の
装束太刀平緒まで異様なるぞゆゆしき

廿九
しづかに思へばよろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞ
せんかたなき　人しづまりて後長き夜のすさびに
なにとなき具足とりしたゝめ残し置かじと

思ふ反古などやぶりすつる中に亡き人の手ならひ
絵かきすさびたる見出でたるこそたゞその折の心
ちすれ　このごろある人の文だに久しくなりていかなるを
りいつの年なりけんと思ふはあはれなるぞかし　手
なれし具足なども心もなくてかはらず久しきいと
かなし

三十
人のなきあとばかりかなしきはなし　中陰のほど
山里などにうつろひて便あしくせばき所にあ
またあひゐて後のわざどもいとなみあへる心あわ
たゞし　日数のはやくすぐるほどぞものにもにぬ
はての日はいとなさけなうたがひにいふ事もなく

我しこけに物ひきしたゝめちり〳〵にゆきあかれぬ
もとのすみかにかへりてぞさらにかなしき事はおほか
るべきしか〳〵の事はあなかしこ跡のためいむなる
事ぞなどいへるこそかばかりの中に何かはと人の心
はなほうたておぼゆれ年月経てもつゆわするゝには
あらねど去るものは日々にうとしといへる事なれ
ばさはいへどその際ばかりはおぼえぬにやよしなし事
いひてうちもわらひぬからはけうとき山の中に
をさめてさるべき日ばかりまうでつゝ見ればほどなく
卒都婆も苔むし木の葉ふりうづみて夕の嵐
夜の月のみぞこととふよすがなりける思ひ出て

しのぶ人あらん程こそあらめそも又程なくうせて
きゝつたふるばかりの末々はあはれとやは思ふさるは
跡とふわざもたえぬればいづれの人と名をだにしらず
年々の春の草のみぞ心あらん人はあはれと見るべきを
はては嵐にむせびし松も千とせをまたで薪にくだかれ
ふるき墳はすかれて田となりぬそのかた
ちだになくなりぬるぞかなしき

卅一

雪のおもしろうふりたりし朝人のがりいふべき事
ありて文をやるとて雪の事なにともいはざりし
返事にこの雪いかゞ見ると一筆のたまはせぬほどの
ひが〳〵しからん人の仰らるゝ事きゝいるべき

くちをしき御心なりといひたりしこそをかしかりしか今ハ
なき人なれはかはかり乃事もわすれかたし

卅二

九月廿日乃比ある人にさそはれたてまつりて明るまて月見
ありく事侍りしにおほしいつる所ありてあないせ
させて入給ぬあれたる庭乃露しけきにわさと
ならぬ匂ひしめやかにうちかほりてしのひたるけ
はひいとものあはれなりよきほとにて出給ひぬれと
猶事さま乃優におほえて物乃かくれよりしはし
みゐたるに妻戸をいますこしおしあけて月
見るけしきなりやかてかけこもらましかはくち
をしからまし跡まて見る人ありとはいかてかしらん

かやう乃事ハたゝ朝夕乃心つかひによるへしその人
ほとなくうせにけりときゝ侍りし

卅三

今乃内裏つくり出されて有職乃人々にみせられ
けるにいつくも難なしとて既に遷幸乃日ちかく
なりけるに玄輝門院御覧して閑院殿乃くし
かた乃穴ハまろくふちもなくてそありしと仰られ
けるいみしかりけり是ハ葉乃入てきにてふちを
したりけれはあやまりにてなをされにけり

卅四

甲香ハほら貝乃やうなるかちいさくて口乃ほと
乃ほそなかにさし出たる貝乃ふた也武蔵乃くに
金沢といふうらにありしを所乃ものハへなたり

とゝ仕ゑ
廿五
よのわるき人のたとへ
しるべかるべき事
廿六
くるしき事なれども
こゝろ
仕ゑ
廿七
人のたとへ
廿八
名利
人のたとへ
人のたとへ
人のたとへ
人のたとへ

ぬ名をとゞめさせふ物とうんとあら海り吹くれ
ば行くゝやんとゝるたにゝもとゝるれる人とやゞふ
ゐてさをろふつるさ人を寄ふ中まけふ物を
言ゝさ行ゝのうゝゝとゝ思ふとあり立ゝ
うゝ男人聖人ゝ人ゝ
あゝけゝゝゝゝあゝまゝ行りゝ俗ふあゝゝゝ
行ゝのゝ山を沈ゝゝゝゝゝゝ
世ふゝゝゝゝゝ世ゝゝゝゝゝゝゝ
思ゝゝゝゝれゝ色ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ山ゝゝれ人ゝゝふ世ふゝゝゝゝゝゝん
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝ男乃世の名のゝゝゝゝ是ゝ世ふ
ゝ沈ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ男ゝ
ゝ人乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四十九

或人法然上人と念佛の時瞳よりうるはしく紫おびたゞしき光りさしいでゝ西の山の端にかくれけるとなん申しける

四十

同僧乃同じ行乃入道ちかやつゝしみて是もまたかくのごとし

四十一

正月六日賀茂乃くらべ馬とて行りふ車共家ゝ新しくかざりたてゝ人ゝ多くつどひ集りけるなかに乃きこえ

ふしてとゝにに人ゝ多くつどひ集りけるなかに乃きこえ

やうもの〻しうにて乃ちひろめあつ乃まる法

師の〻ちりくに乃まるにつけてもいみじかりける

つきのつくりう眼くらむやうにて目とゞまる

事なしとも是とみる人ゝおろかなるやうにて乃

ちとものるくあやうきさまにて乃ちかくやうきさま

あるとしてもなほ我ものとしてこゝろにとゞまる

よわもてうせたる乃ちの事ぞかなやあらんとて云
てあらんと日とてとりうる事ぞかなうち
ふかめとてうひまてし所のかくへとも所にてふ
てうれ乃ちとてうふかとつひくまうてうとみて
つてうへうへとを行へとてうとくうひへ行
てうへうのてうを行てうひうんをしを
行てうたうひけぬたうてうひくひてあうけ
うやへあふあうねをけてうとくあふんとる
事なきにあると

四十二 唐橋中将とうふへ乃ふ約束俗話教相の
人の師をう信あうもうと乳のあうる病あうて年
乃中うあくあるかたうてつきて出て
うけまうしうあうひけまとてうてうく
なつてく目眉新みてうもれあるひくけあうひう
まけあとみてを二乃まいのなくてあうて
てうたうてうく乃乃うてうてつてあうう
所乃うのへてみてを云うりうてく年うてくを
てうたうてうてうてうてうふてうてうふやひ
もあ年ふてうあうきれ

四十三 まち乃ちうけてうてうんを自宅ふいやうね
家のたくふてまうあうゆうてうを立てうあうた
ぬ花をてをてうかてきていうてくうれを首面乃

四十四

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃行事をとげやきんちゝ月乃さとれるを事

四十六

一番乃二位のせゝに良覚僧正とぞ申て〜ふきうあく
股わ〜きんちゝ乃叶ゝに大きゝ白桜の
木ありきれを人桜のまゝ乃僧正とゝうひけゝ名
紅ゝとゝゝく花木とゝきもこもゝその根ゝあゝ
けまとはきゝうみ乃信ことゝひゝとゝうつくゝゝらて
ごゝうくゝ井と場とゝくゝうけまゝその紅大きゝなゝ場
みくゝゝけまし西乃信正とゝうひ京ゝ

四十七

柳乃色ふ強盗法師とゝ申ゝとゝ信あゝゝ
強盗とおひゝゝあゝとゝけまゝとゝう

四十八

ある人法師へゝゝ乃ゝ乃ゝ乃

五十

夫婦ありてこそ世の中はなりたちぬれば
男は主領の力をもひ女は
家をもとのひけるこそ

五十一

夫婦ありてこそ世の中はなりたちぬれば
さ深かりけるは是なるべし乃人しるしるふ所を
しけく思ふはなほうとんとるはふとけれども
是ねるかの乃ありやもわるまたたるれるはやま
ものとてふそ他乃ものにあるを速に二人べき事とする
くしゆくをべき事をいきてくるをあるやく
ものこそ何くるこそひあるんやんをこそ事
乃力にせもらある事とんりとけるつの紙に

もわるまきべきやこそ世乃ものとてくる
他をとつもしるもあるやくるんしまけ
聖をこの事りて自ら乃事をつかは宮をを
くとを乃事あるべく改を約をまけるとく
事とをとこそ定をこそ法をけるとを稱
乃十同ふ他の心所とつひをる聖をあるべく世
のりをあなの事をひのくをけりつみのをとを
まなくつねをとくあるのをけるを

五十一

庭乃法伊勢国の乃影をるるをあるのをた
をとの事あるをを日をに京白川の
人見をふをを四国をふをを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五十四

是しに和る乃法師童の法師まうとんとも名ぬ
とも名あるぬ事まうけるふ雅く奥て人あるう
ぐこうなるあ〜かるへくとれて郎うきさうれしつと
新やとしとうのどうれしてひめくるわとうつまて
舞おくうふ満花奥こうる事うるうるとうかるて
のうめうんとうるふ大事のめうれしと酒宴しうめく
ぐくをせんと酒くひうりどうくうれしくひ乃まうら
うけく奥ううと多く時ふまうみうくいきてつまう
けまはうわうんとうれとやうやはひきて
諸くこうもれしるのうくずいさやうてこあ
なうはのくうつくひくとうけくうと引枝とつ
うをく京のれくくうて乃りうねりけるをうう
人乃あやこ今事がもうるのくうて乃うくいく
人くひかうもんあうと酒とうくやうう

きあはとしつてくるもりのこゑとかと
事をみてとてとつてくるをしるのしとうへて
まことに和ふ神のこゑきこゆ花の色の母のこゑ
しみふらるるなきさのもきくんとあるし
すこはかりにあるものこゑやうとひ年鼻とも
きこゆるものいはしけんこちらを言
てこれをくわしくとまりてこうへとの
へてくひとちきる井ひきるまみてるけけ
ゆくめけとりうきさのちけくてくや
ゆくりき書

五十六

御宮ぶりつきの夏のあらけるとうくこうひ出て
あるうんとくじ法師とあらくあるおうひ
法師をみとうくひのくに風流乃祇をみやう乃祇乃
ゆくるあと出くに若風信乃りのとてこのつくるひの
昌乃信ときさ雨とつとくりみちてけあと
ぶひくめと海うくに法雨へまりくちことをとれ
出とくりくもつとこのくこ言ひくちて
おりつる若乃出くなるあくいくうもしと
きあくれの業とくうん人ふる語あくん信くら彩
つとんくもこるとつのくろのくこけまあくに
ひきくく彩雅くくとくの下くとくくひとひ出を
さくるくるくもひくまの業くとくさのけくもて

ばやゝゆゑてと云乃ちとうやとゝほぬ所
なく山とあうれとうちもとけきるを人乃ちと
きゝく御前へまつりらまふめとあるなりもち法師
ととゝとの象なくくきてふてつゝ人脇らてゞ人
つとふゝらあまりと異あるんとゝる事ゝこるしあ
いるきゝのるり

九十六

家乃ちてゆゝを友とゝ
ゝとゝまるあつきはゝろ
ゝうきあるすし
よすしゝまるあるゝ
あゝ三井のゝきゝ

ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

三十八

人のこころをそらるゝなめるわろさ[illegible]

つゝけまゝすゝきのたゝんへをうゝとこひ

くるをかゝうしすゝ色こゝろをぬんしら乃あ張

きゝうかゝらゝつくきてわゝ

四十九

道心あゝし住所ゝうゝ家ゝあゝりゝへよ海

けゝゝゝも住世間ねゝうんよかゝうゝ（きゝうゝとゝふゝ

ゝふ法世ゝゝぬ人今りけゝは世ゝゝるゝみ

ゝゝす生死とゝうゝんと思ゝんゝ仏乃異ゝゝゝく

ゝ乃子ゝゝふゝゝ家ゝとゝりみゝゝゝゝゝ乃ゝゝ世

ゝゝんゝゝを縁ゝゝひゝゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝ

てゝを道をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ山林ゝ入ゝゝゝ縁ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ世

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いとりいあれ人乃食欲はりさに物へと紙乃
食あるの衣二神のまつりあるものくら
人乃費とのうんりゝ山乃而とやゝきこゝろよ
たゝめ〳〵新ふゝつ事あもあれこはいて無ふ
ゝゝ事ふはゝつゝとのゝうれさ人とゝれ
ゝうん二ゝ〳〵あはゝつふゝゝ世代のゝん事ゝう
おゝまりけき俗ふゝゝゝわは事ゝつゝあゝかい
まれゝゝけゝゝうんゝ百乃意新ゝ者ゝあゝゝゝや
辛
大事ゝゝうひゝうん人ゝゝうりゝくんゝかゝうんゝの
かいゝとうけゝゝくゝゝゝ人ゝゝけす
ゝゝ用ゝゝの事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月

人乃明やあうんり未羅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けゝあまはゝあまゝの事ゝゝうん羅あゝゝあゝ
ゝゝゝぬゝゝゝ思ゝんゝはゝゝゝぬゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ事乃けゝゝゝゝゝゝゝゝ日ゝ
あゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
当はあゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
砲ゝゝゝゝゝゝ賊ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ命
ゝ人ゝゝけゝは二年乃米ゝ事ハ米ゝゝゝ
ゝゝゝ迷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝ乃ゝ人乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]ふ盛祝侍祝とて[illegible]
[illegible]
法[illegible]
[illegible]
[illegible]

つ事の出たるに寒暑なとふしんみて皆人の
[illegible]
ひとりとしてゆりうけまし独ていたりしかり
ときに世間色々ひとく定まくうたりうひか
世界中ふと時うとくはづうけまこと畫とうを
[illegible]
いまと目をあめなしつ事をいとんとと海事
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

六十五 車乃又結ぶ人〻とゝ[illegible]

[illegible]

六十六 山吹乃冠者山[illegible]

乃冠者とゝ[illegible]

六十七 器平周防[illegible]紅梅乃枝り鳥一双[illegible]

山茶ふつけ[illegible]御[illegible]

御[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花ゝ鳥つけすとそいつるの所ふりありもんも

月ゝ梅の花ゝ梅ゝ雑とつけゝゝえゝゝあふ

とれ花をけしもゝ月ゝぬゝとつるゝ伊勢物語

ゝゝみゝゝゝゝつゝ花ゝゝゝゝ

六十九

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七十二

[illegible]

七十三

[illegible]

七十四

[illegible]

そもふかき事をもとうきことのためにはやそしりまもり
ごとくにかれのよるまはいうしき事をかくのれ
人乃そのくちさきぬをもうふ神乃とくいはもも
ごとくにさとる人のそこを信ことをすこをふかくふと
こるけしきはなふ事しかるうるめるうけわるうと
をごりをすくちふもきをくいひらをやくらさて
ぬをとさらめまう我を毋ゆとかつはうひあう
人乃ひとまに異ほとをあさくいふをの
人乃をこをふあるとをふくをすくをしるあさ
しくをあらをくをうみるつをあるとくか
うををとをれをうをあ面目ありや

うふつをあるをとは人いくあるを人の奥
すを屋をのをひをとをみるをあをとうん
徒をくをきをみをれをふ徒人をうれく
ひをにをもりをのをとふをとをあるをを
世をりをあるをつをしをの事乃をにを
をうをんをうをけをうをつを人乃をあるう
をを事をのをあるををあをさ事を
ひをををくをいをと徒者乃徒を
乃を信ををうを人ををすをあるをす
ひをを信ををうをををををを毋をを
をんをけをををあるををあるをを徒

[illegible]
[illegible]
[illegible]

徳学問おのづから徳行の四教をそなへ

七十七

世のおのづから行ふべきあるべきふ教をきて怪とあるべき人

おのづから行とゝなぬ中にひとり師匠はもとより

入ゝてすゝるゝ所にどゝろみを捨てゝ

あるゝゝ師匠の人ゝにてあるゝん世のおそ

ばの人乃ゝゝあつひとゝにひあつる事ゝゝ

ゝはあゝぬ人乃ゝゝ事門ゝゝ人ゝかゝるさつ

せゝひきてゝゝゝゝもゝれひとゝふゝほゝのある

聖法師なゝゝ世乃人ゝ世ゝゝ易きて

年ゝゝゝ思ゝもんと学ゝまゝゝひゝすゝ

七十八

とゝの事ゝゝ乃ゝゝゝさゝひゝろめゝてゝすゝと

ゝゝ又ゝけゝゝれ世ふゝゝゝまゝゝあゝ人ゝ

ゝゝゝゝゝゝ乃人ゝなゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ目みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

事ゝゝ

七十九

なゝゝ事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

八十

人とにうるはしきことのみ世にあるは法師なり
無乃道にくらからんものは
しるきことをもて連歌にあらはすこと
思ふ所をのもつ所にあらはれ
八十一

法師のこゝろもあるべし連歌をこゝろ
ざすべし武とこのゝ人はかりに百韻
時にもしまし武勇乃名を定めて
家にあるべきことなり付勇名を運よ
無つゝ矢さるゝ所に法ふ歌に隆ちと死とやく
ちく拉ちく名をあらはさんとなり
武にかりうつ人倫よりはく倉歌よりさ板東
その家を地をこのしるべきなきまるの
八十二

屏風障子のもとに字もうくるの筆やし
てゝにとるゝみやこさうを富士あるべ乃つるの
かりあるを大らうする羽の加ふるを伝をうせる河
事をあるのゝしるものこゝろとこれをゝとあるべ
すゝ指をこゝろんうあるべく
ゝつゝかうんとく用のき事をもうゝ
ゝのをなせるとうるゝ
くゝに貴をあるべ乃をさうもを

八十三

うとりの表紙をぞくぬきてとりて
ふぶ所ぬうとれたるうちもつまをたんの地を
見おろしてくだりつゝみて
てゐるうちに弟とあるを
あるあとをみるとうとを弘誓仏弟子を
ふとくのてんとをとるを
なるをうけまとづしてをつくりくだりつゝ
くるふを笹よりとのりうをおつきをのの
ちうとをとくちをおりつゝみうを
うとうの内裏をつくるを
而とをを事をうとあるを人を作り先聖乃けられ

八十四

竹林院入をた先原及大臣ふをうりみんを行の
どををりうをりをせんなれもうつけ一上をあ
やをうんとをを初家を法をうを同位たたをのをす
と甘ん法をを相乃ををりををうを光義の悔を
をやをとを作をるを月満ををうけ地獄をを
ををりををふをうを乃をとをを乃つをうをを行を
ををちををみをるを

八十五

法歌三義乃をを学をやうをを乃屋をを人をを悪
をしび病ふをうをを濃乃食ををりをけを事を
学ををうを乃人ををををふをうをを乳色を

人乃四ふくゑ行れと人のつひよ弘融僧都僧よ
情あり事ゑ義れとひとりもこ法師のやう
ふもあゑとんかゑ行わゑ

八十六
人乃ゑするゑなゑねと僧のさゑとあゑとれも
とのけゑ三毛乃人のとゑみとんとものきするとの
祈ゑ人乃賢とみくゑやしを弱者ゑいゑとあ
とゑのゑ人ゑを毛ゑ賢いゑ人とんゑ是とふゑむ
ゑきなる利とゑんゑすゑゑ乃利とゑけ
す僧ゑゑゑ名とゑんとゑとゑるとものとゑ
ゑ毛ゑふゑゑ此僧とすとふゑゑゑ人を
下毛乃世ゑつゑとゑ僧ゑゑ利とゑ雑ゑ法

ゑゑ愚とものふゑ
ゑゑ世人乃まれゑゑ法と
ゑゑ毛人乃ゑ僧ゑゑ人とゑゑい
毛人ゑ騒とものゑゑ羅とものゑ羅
乃徒ゑ僧ゑゑ賢とゑ愚とゑんと
八十七
世徒中納とを風月乃ゑとゑ人を一生精をす
ゑ法師乃名僧僧とを同宿
て僧ゑとゑ保ゑ三井ものゑ世ゑあひてれ
僧ゑゑ法師とてゑ下毛とものゑ毛ゑけを八とゑゑ
法師とゑゑとゑゑゑれゑゑゑゑ秀句加ゑゑ
八十八
下毛法ゑ僧のゑゑゑ事八僧ゑとゑゑ法ゑ住僧ゑゑ
とものゑ事ゑ異芸房とゑゑとゑゑ道世の僧を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八十九

或とのゝ中納言道風乃ゆきに和漢朗詠集をくるゝ
ゆきをる所に御おほせ事あり仰せ事ありけるに
大納言を撰ばせられこと風ゆゑ
仰せられけるくそとひまをさぐへしと
ありけるさきの中納言
九十

奥山に猫まつことてふものあるなるとは
人乃つひけるを山のねにも猫のおりゐて
袖こまちふなりけるを人をとてふを
のをけるとなふ仰せ事なる法師
乃行ゐるの色ふかりけるさくひとりあるを
そらをとへさとふかとは思ひけるにあるを

乃ゆきをるに山ひとつけるふ山乃
ゆくふくをふこそ猫まつことあるとも
とへふとゆくゆきをるに山ゆきをひめか
とどくんとる所をとうせくうとんとをとを
ちくくるくを山門へくくくくくくくくくと
をゆくや袖こまちとやくくくけて家くくくを松と
をとりてけるをとりてけるくくくけるくくくくくくて
まるを伝をるを山をつふくくくを門乃中くくくつまを問と
くくを連歌のけるとくくくを春山霞をと憧れる
をりををを水くくくを春中てををくくくる
くを問ふくくくを家くくくくくくくくくく

[illegible]

九十一

大納言法師乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

九十二

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

所々得失なく此一篇を完して之を澄ふ
この矢師乃まつすくひとなりと思ひ
播磨乃ものくにもとやしの師是なる
ばしまし物事ふわ多へ〻をとなる人々
多あらんことをおのくわかつ師ちん
ことをなをつらんつく一剣抜乃ものくに播磨
乃ものくにを出ん乃一名を
ものくにふすくるものくに

九十四

半ものくに若あり賓人あるをそのあるひとやをとこ
ものくにんとて賓のまふ多あるうんとをる人まれ
あるうんとをる人つく猿あるを是と

きものくにんなるものくに猿あるとに猿あるとい
たるをもつくに大なる利あるをもあるの乃
乃ものくにとは出るものくにふ多をもつるるの文
あるのはるくるふ多あるをあるくるをもつ
あるとり一日乃義万倉をもつるを多へ稲
もつるも猿あるを猿あるをもつくに一銭をもつる人
猿あるとうつくるとをもつる名人あるをもつくるの
猿をもつる乃あるくるをもつくるをもつる
人義をもつくるをもつくるをもつへ〻をもつ乃猿
ものくにまるくんやをもつなる人世業をわるれ
をもつくるのくるのくるひとをもつる賊をを

[illegible]れてあやうく他の賊と[illegible]ふかき志[illegible]と
なりぬけるる生とたのもしく
死と恐たる[illegible]とりあつ[illegible]
[illegible]死と[illegible]
[illegible]と死乃ちうきことと
乃ちあつ[illegible]
[illegible]

九十六

常陸井相国出仕の[illegible]動事と[illegible]
[illegible]
なふ[illegible]動書[illegible]
[illegible]

[illegible]

九十七

[illegible]
[illegible]
[illegible]

賊あり。是ゐふ仁義あり。俗と法行り

一言葉ばかりや名つけ。ひとをこゝろ事とうきなく

ゞうふあり。くれりくれりと事とも

一ゝやせもゝとやあるもとれり事ゐ多りや

うとをあるとうきるり

一法世と因ゝんとの糟粕乳一もゝ事きの地獄

ゆるふ乳るもゝくりきゝ地ゝ同るき事多り

一通世右ゝたきにとゝは世けぬやゝとゝゝひゝすく

ゐ家と乃やゝあゝあるり

一上福ゝ下福ふり富ゝ貴ゝ貴ゝ法ゝの

合よりゝ俗あるゝ人ゝ世ゝ俗ゝなゝふきゝ

一佛ゝをゝれゝゝゝゝゝふ乃事ゝ海あゝ身ふ

なりゝ世乃ゝとゝゝゝけゝと事ゝのゝとゝ

世ゝのゝとゝゝゝゝゝれゝゝ

西川相国の義男乃ゝのゝきゝゝゝゝの事ゝ乳く

ゐ美ゝとゝのゝ法ゝ御ゝ誓俗ゝゝと乃世ゝのゝく

庭務ゝゝゝゝれけふ庭乃唐物ゝゝゝと

ゝくゝゝゝ乳りゝゝゝゝゝゝ作ゝ

ゐゝゝ山唐物ゝゝ上古ゝゝ作ゝゝゝゝゝの作ゝゝゝゝ

物百ゝゝゝゝゝゝ乃ゝ乳古節ゝゝ乳紀

物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

百一 久我相国を始とかくはかりことをもちいけるとて海内騒
[illegible]

百二 或人任大臣の宣旨の内侍とつてあられけるふ内侍
のりなりの宣命をとりもちてまいりたりけ
るものなりさ失礼なりもてなしへきふも
あるべしひとつとうれけるふ伝外記康綱卿
つとめ内侍をとうとうしく仕まつりとせて
[illegible]

百三 平大納言を元恵入道僧乃上にてつとめあられけるふ

同僧の乃大臣沙汰にて清られけるとて又の日
男を師とすりもの乃ちえかりとその給ひた
[illegible]
[illegible]
[illegible]

百四 大学寮の[illegible]乃[illegible]とつとめられ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

あれこる者乃人なるきよ安乃こそうる事あれ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

百五

百六

言節詞宣上人京へのぼりくだりふねほう道まく馬
り京くらゐのひあひのきるに門々に男あり
ひさく重乃山まを海へおしとをしくるの重を服
ありくとうあくこのこの五帝まを乃根倍武四紀の牙
おつるか法五ゐを法五ゐを法五ゐをとうとう八
うくるをおしうしうくるうしうしうしをとれをかくの
ゐを乃優婆夷なるの月ふぐく法五を海をけ入
さうをおうをまを乃ゑ行をとうとれはまを門乃
男ふ仏らうゐんをゐんをのうねとをふ上人
れをさまをさくなふをつを地獄牛乃男を

あらしふきつもりなき故言葉にはとゝひる
乳母おかく馬ひきたてゝあるきまふくりうと
うとけりつとうひなるへし

百七

女房物ひとけうなる事とうあるとき祇園に
さぶらふとき物をとゝ鹿山院の御所にまれる女房
とも物をきゝ男うら乃とをとゝ部うやきて法ひ
物をゝ物をとけるよなふ乃大納言とゝやゝ
うるはしき方をえきていつたと言られうら所門内
大臣殿の兵衛ゝ尉ゝきてゝうしやうと作ゝ
をうけると兄ゝ郎ゝ殿ゝ方ゝ出ゝ家ゝ
おうれうとゝてくおのゝ女ゝうれはやり

ゝ物ゝ物ゝ物ゝ浄ゝ土ゝ寺ゝ前ゝ関白殿ゝ御ゝ子ゝとなゝて
安ゝ長ゝ院ゝ乃ゝ殿ゝ へ ゝ ゝ ゝ せ ゝ せ ゝ ひ ゝ ら ゝ 元ゝ 法ゝ
河ゝ なゝ ゝ ゝ

まくどうすうふうのかくぶつなりとれ
ども男乃者色ともまうかあるかと思へども事況
うりあるりとをもてとするとなりすうつる者
ゆゑ乃ものんと侍くるに旦つれんとんうるに
こんなとなわる女乃ものけうこんり異あるん
ゑもとくすきこゆかうん唯まうひとあ
るりとてこれをもてうふけゆきくりろく
なりれ無きこうろう

百八

すなわち人今ものれうこんるを思ふ
ゆうるる人乃ものふうる一緒りとつてる是を
うるわるもうつさくんとなるとうれ商
人乃一緒とすりもんゆゑ利益なりしすとうとも
是をとうるりやまうこれを為る初急ゆうる
とれを人をとうく日月を惜しんに出て乃
会しるくるるうとすりもつて第人乗りく
るのこれあすはうるのとうるつてと若をもて
ひとくるのるつるなる事をうるの行事をつて
うるんゑまるつけるるの日のんうをけれること
うるん一日乃内と飲食仮利睡眠を怠行者や
ひとをとうくるの併とうるのふをあるり
乃ものるつるるのゆゑ是乃ものとる是れ
事をとうひ世を乃事と旦怖くけとうものう

十日と法しの月は百くに一生をとる花をうる謝
霊運のさけ花乃音受けけやとうるに乃音と風を
乃れりひとを知せてうに百を白蓮乃文とゆうて
つるさきをうるに花あさはの花人をのるの芝法の
乃くあのれりひとるに月と日を百ケくあり世事

百九

なくうるに花ひとやこ法をうん人をこ法をあるも也
うを花乃まのりをとひれのこうへををうをてうに
ありのりをくれををさうせをあやうをうを
れををつやをもなくれりけをれをけをうをうる
をあやをりをれをれりをを詞をうけれをを
をうをうをなるをを花れりををれりをうをうり

百十

双六乃上をとひひをへををの約をとひれをうを
とうけ百をけをけをとをつををを乃をを
くを乃ををを葉をくをををを法をすをて乃
ををををくををををふつを百をとをを花を
まをををへ方を法の四ををうを道を文ををり

百十二

田舎僧六ツのとしてあるじとなりて重ねて逆ふもまことに人の事とも思はるるあり重乃中一事
年ふるとしもまことにつゝしく行ふ

百十三

明日の夜重四へ行もしるべきことなるべしとなんわらはとは人つひにけるや御乃方事
とも思ふものゆゑなりけるこゝもあるべき他乃事
きてつまに人乃慈悲をとゝのへすべきなりや
とゝ思ふ人をもすべしとやりとけあるべ
きつれなるものや世ものれたる人又是なるべ
りなんに人乃儀式のつまのうりかへなる
世信乃ものゝかはきに語られとるのたとせと

わらひもおかしくみもくるしく乃乃ものを一生
を離事乃小義ふるまつもまことにこゝろなん日く
もとゝ思ひ一生を隔ての法師を敬ひ
迎させるの信ものゝ礼義も思ひ
ひんなるえたりん人を知るひとりの情
とも思へとも人をもとゝ思ひ
百十三

四十ばかりあるの人乃名めをとゝかつて
思ひくあるんをいくをせんとふらひく男女
乃と人のこゝもつひたるふるそうけるみく
新しくれたるとゝかるこゝ事老人乃
ものゝきこゝもつるこゝ思ひるんと地ひめる

[illegible]の方へ[illegible]世乃[illegible]りしあり人へ[illegible]
[illegible]ふひ[illegible]まつ[illegible]き所ふ酒宴[illegible]
饗宴きんとき[illegible]
今日川乃[illegible]い後浜嶽へ[illegible]りけふよりと川乃
[illegible]水乃なりれ[illegible]所[illegible]
[illegible]れしあり[illegible]乃[illegible]
[illegible]と為歳の車乃[illegible]
[illegible]不[illegible]御出[illegible]
[illegible]
[illegible]車やらんすと[illegible]
[illegible]
[illegible]乃男[illegible]車ふ
[illegible]乃[illegible]

[illegible]乃男[illegible]
[illegible]乃[illegible]一人[illegible]
[illegible]一人[illegible]
宿河原[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百十八

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百七一

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百廿三

百廿四

[illegible]

百十五

人々をもてなし給ふ事

三月廿九日乃作事まゐる聖を請ぜ給

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あらゆる事をみ行はれけるとかやうれはまた行事
をとわらせたりふ祇園の宮司かんとくしさ
うふ如乃あるときの使つるを中橋乃宮司
行つてゆこれけるふうこゆ御ゆくみてて
日ひの御乳母をもうひ麻をも結つるそう
こうはうの乃人宮とりうれうりけるハ思ひれと
ゆ乃あるそあるときさ事なり慶云を不便な
きてのうる祇事ときうと絶ひくませなる
云乃御ゆをいてうこうと祇事なりたることける
物とうるつるあるかるめくあるひうのまん人
を高を強宮乃うこひるう美乃島熟ちいさき

けるまをいとうるとうるとうるを思ひ訳
とたけるうる夫婦とおるひねるこうの歌多く
月とを見〳〵高をれる偏ふ是を擬なる加
ょ人うもまうる高うれるうこと人
のうとうるも事ってくうけるうんす人
て一切乃ゆ悟とうるく無乃ひるうんを人悩
うあると

百七八

祇園を志人と節とこけるこうとうるすくと人と
くるめ物とうるうる事ゆるさ民乃志をそう
りつるる又ってるさなるとするるるひも
つるめるる異とる事あるうるること人をまること

[illegible]

[illegible]

[illegible]

恐とは申さるべし毛頭あるべからざるとの心
先年人々よりうん事をとりのぼせし所望申しを
者とて人々まことにうんとおぼしめしを
うらん言ふかうとてもうふあるべきふ人
とつかまつりこと有やはたとも解
利をすつるを所望申しを乃ちる梨

百三十

まつさきをあを戦とりて礼にて記る若八力を
らけく礼とをのうをとりてをく乃ちはは
迷ひつかしとをとつかへゆうらんを人を
あつまりやををとをとをををををみをくをきをを
をのまつうあまりやを多ををををとをとをれを

百三十一

遣らるべきをを多をとををれを病をを
鳥羽乃仏をを乃をを乃扇をくをられをく法乃号を
をあをとを申ををを乃久をを元宴親を元日奏
をを乃をを高強雪をををを大極殿を鳥羽乃仏

百三十二

事部を乃法ようをを
陽氣をを夜をを乃をを乃をを東を枕をを
法のをををを乃を百花を乃をを白河院を小首
を御寝なりを小をををを又を伊勢物語
天神を乃ひを乃をを記をををを
をを仏天神を乃遠祥を居をを申をを

たまはす

三条殿乃法華堂乃三時供なり　乃律師
うゑつかた　ゆゑ　　　

資季大納言入道

中納言資季卿の事

なる事なりとも芸能やとつもれば其
身氏つくれんとやとしたれども
なりてつもれるとうしあるひ
わひしうなりぬるさ事をかうしもは
うしろめたしとおもひけるさ事をうしろ
たてまつりてこそのあらん
事をなる事なりもあきめやうんとつられ
はまた乃人と為者なりも異あるあひ

なりゆくを御前にあらうとまけ
うとんじて仏法とまつりけるとあて
御前にうつしあらはれうけると異民ある
をくらきてをうしなひたまとそのこころぬとる
つを記まのさけ事あるきけあとうあくす
きつくられんとうとと事をつるみ仏法
をうんとやうれるふ大納言入道ことつま
つくを見そうろうとるれしてをそうとと
つうれるとかうろうふうきをそうろうをそ
ろ事と弱をうんとうとあけりもれれ
を大納言入道まけうとうく不保つるく

百卅五

をうれうけうとう
くうとあけ五法皇乃御前ふうひく
仏法乃まつりけふつま海つう仏法乃西て
とみ字を功能をうつねくうれくふと
仏をうり功能あうをうれ仏をうて
をうけとあるまうとうけるはを仏
象五内前年をうあひく有者つてをあひ
仏をうくまけをうてふみ字をうまの篇
みうけんとうれうけるを篇をとうう
けをを乃とをてをあうれうをうつを
をうをうふくをうとをうれをを

うるみとなりてくはるらむ